

実践2 「あれで試してみればいい」

概要 興味の対象のザリガニと、自分の経験から同化しイメージの世界で遊ぶ4歳児の姿と、興味を深めていく過程で生じた疑問や問題を納得するまで友達と考え合い、多様な学びをしている5歳児の姿を捉えた実践です。

ポイント 保育者の鋭い観察力により、子どもが興味をもつきっかけや疑問や問題に直面する場面を見逃さず、実態に添って必要な物的環境や人的環境を工夫し、子ども自ら考えたり、試そうとしたりする姿を支えています。4歳児と5歳児の対象との関わり方の違いからも、「科学する心」の育ちを顕著に読み取ることができます。

福島大学附属幼稚園

4～5歳児

場面1：ザリガニ眠いのかな？ 7月

子どもの発見や考え 保育者の意図的関わり



・ザリガニ釣りの遠足へ行って釣ってきたザリガニを、保育室で飼育している。遠足の時には、なかなか釣ることができず、飽きてうろうろしていることが多かった4歳児だったが、幼稚園に戻ってきてからは、水を張ったタライに入っているザリガニに興味をもち、釣り竿に餌を付けて釣ろうとしている。

・餌のスルメを釣り竿に付けたAさんが「何だろこれ、全然食べない」と言うと、Bさんが「顔(煮干しの頭)にしたら？」と言う。Cさんが「顔？ ああ、きぐみさん(5歳児)顔で釣ってたもんね」と言うのを聞いて、Aさんは、スルメを頭付きの煮干しに付け替え、釣り糸を垂らしてみた。そのうち、Aさんが、「全然食べない。もう、やめた！」と釣りをやめ、3人は別の場へ行ってしまった。

・Dさんも釣竿を垂らしてみるが、ザリガニは一向に釣れない。Dさんは長い間、ザリガニをじっと見つめている。Eさんがそばに来るとDさんは「あのねえ、この人(ザリガニ)はお腹いっぱいみたい」と知らせた。しばらくして「…眠いのかな」とつぶやき、釣り竿を垂らしたままテラスの人工芝に刺して立てた。そして、タライの横にDさんも寝転んだ。

・それを見ていた他の子どもも、ままごと用の布団を持って来て、タライの横に敷き、寝転んだ。「私たちザリガニのお母さんとお姉さんね」「D君はザリガニのお父さんね」と、ザリガニごっこが始まった。

場面2：あれで試してみればいい 6月

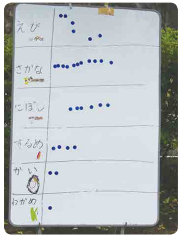


・昨年から5歳児は、ザリガニ釣りに向けて、餌を考えたり、釣り竿を自分たちで作ったりして準備している。今年の5歳児は、去年の経験から「ガム」「パン」「花」「するめ」「煮干し」「りんご」「梅干し」などをすぐに思いついた。

・Fさんの「花では釣れないと思う」という言葉がきっかけになり、子どもたちの話し合いが行われた。するとGさんが「あれで(飼育している1匹のザリガニ)試してみればいいんじゃない？」と言い出し、翌日餌を全部入れて試すことになった。ガムが水に溶け出した様子を見て「ガムは水が汚れるからダメだな」「パンやお菓子は柔らかくなるからザリガニは掴めない」と自分たちで結論を出していった。その結果、子どもが考えた物は「ザリガニは水の中にいるから海の物が好きなのでは？」ということになった。

・翌日、海のもの(エビ、貝、シシャモ、スルメ、ワカメ、サーモン)を数種類準備し、もう一度試すことにしたが、前日にたくさんの餌をもらったザリガニは食べようとしないう。 「何でだろう？ 嫌いなのかな？」「お腹がいっぱいなのかなかもしれない」とそれぞれに自分の考えを言葉に出した。

・Hさんは「昨日、食べた煮干しを入れても食べなかったら、お腹がいっぱいってこと、もし食べたならこれは嫌いってことなんじゃない？」と言い、煮干しを入れた。ザリガニが食べないことを確認すると「やっぱりお腹がいっぱいなんだ」という結論になった。そこで数日の絶食期間の後もう一度試すことにした。Hさんの提案で、「好きな物ばかり食べるから、食べた物は出していこう」ということになり、ワカメ以外の物は食べることが分かった。しかし当日は、「やっぱりワカメで試したい」というIさんの思いからワカメも持って行った。



また、餌を書いたボードを持参し、釣れた餌にシールを貼って調べることにした。

- ・ザリガニ釣りの朝、実験に使われたザリガニは水槽の中で死んでいた。前日に煮干しをいれたままにしたことで水は濁っていた。その様子を見て、Fさんは「餌をいれたままにしたから、水が汚くなって死んだんだ…」と言いながら、しまったという表情をした。ザリガニ釣りの終わりには、保育者が落とした餌を拾い集めていると、Fさんが「そうだった！水が汚れるとダメなんだよ」と言って保育者と一緒に水際に落ちている餌を拾っていった。

場面3：消しゴムに匂いを付けたら釣れるかな 6月下旬



- ・ザリガニ釣りの翌日から、子どもたちは保育室のタライの中で釣りをしたり、手でザリガニを持って観察を始めた。 「鬚は3本あるんだ」「足にも小さいサミがある」など、今まで飼育していたザリガニでは目を向けなかった所にも気づき始めた。
- ・ザリガニが身近になるにつれて、知りたいことがたくさん出てきて、子どもは図鑑を見て調べようとする。雌雄の違いも図鑑から学んだ。4歳児が保育者と「どっちが男の子？」と話しているのを聞いて、図鑑を見せて「これ！ここが違う！」と、自分のお腹を指さして見せていた。
- ・ザリガニ釣りの時に園長が、たくあんで釣っていたことを思い出して再現していた4歳児を見て、Jさんは、「えっ？たくあんで釣れるの？」と驚いた表情だった。Jさんは「海のもでなくても釣れる？」とつぶやきながら、自分もたくあんで試していた。その後、「ザリガニは何で釣れたか？」をクラスで話し合う機会をもった。「海のもで釣れるけど、ワカメではあまり釣れない」「動かない(生き物ではない)から？」「でも、ワカメでも少しは釣れてるし…」と自分の考えを出し合った。Jさんが「たくあんでも釣れたよ。動かないけど食べるんだよ」と言うと、Kさんは「匂いだと思うな」とつぶやいた。
- ・その後保育者が、「消しゴムとカマボコ、どっちで釣れるか？」の実験が載っている絵本を読み聞かせると、子どもはすぐに、「やっぱり、カマボコだよね！」「美味しいからね！」と言っていた。LさんやJさんが「やってみたい！やってみないと分からない！」と言い出したので、翌日、実際に試してみた。
- ・「カマボコは柔らかいから、掴みやすいんだよ」とMさんが言った。保育者が、「堅さなのかな？どうして堅いつて分かるのかな？」と問いかけると、Jさんは消しゴムとカマボコを見比べて「見ただけじゃ分からないよね…」と言った。カマボコを使いきった時に、Jさんが「煮干しで消しゴムに匂いを付けたら釣れるかな？」と言出し、消しゴムに煮干しをこすりつけ始めた。そして、ザリガニの前に糸を垂らすとすぐに食いついた。Jさんは「やっぱり匂いなんだ…」と嬉しそうにつぶやいた。その日の降園時にJさんがみんなに報告すると、「魚の匂い」「いい匂い？」「たくあんでも釣れたからしょっぱい匂いだよね！」という結論が出た。
- ・その後もザリガニの絵を描いたり、世話をしたりする日々が続き夏休み前には、釣ってきた沼に放すことにした。3人の子どもは飼育するためにザリガニを持ち帰った。ボウフラが蚊になることを知ったMさんは、水槽にボウフラが湧いた時に「あっ、ボウフラ、蚊になるから！」とすぐに水を取り替えていたことを保護者から聞いた。
- ・夏休みが終わって、残しておいた「つがいのザリガニ」の世話をしながら、「今、お腹のモジャモジャ動かしているから、卵生まれるかも！」と熱心に観察するMさん。Nさんは「僕、ザリガニの赤ちゃん産まれたらへその緒見たいんだよねー」と卵が生まれるのを楽しみにしていた。

【考察】 場面1：園に帰ってから、5歳児が煮干しの頭でザリガニを釣っていた姿から、自分たちでも再現しようとする。慣れた場であることも手伝って、少しだけ持続するものの、やはり、興味は違う遊びへ移っていく。ザリガニが釣れないということに対して、考えたり工夫したりする姿には至らないが、ザリガニを擬人化して考え、ごっこ遊びの仲間のように捉えたり、自分もザリガニになったつもりで話したり動いたりなど、イメージの世界で4歳児の遊びが展開されている。

場面2・3：ザリガニの餌について経験をもとに話し合っていた中、「試す」という方法をG児が提案した。またH児は、ザリガニが餌を食べなくなった時、「好きか」「嫌いか」という二分法だけでなく、「お腹がいっぱいで食べられないのかもしれない」という別の視点を付け加えた。そして、それをやはり「試す」という方法で確かめることを提案した。J児も、匂いに鍵がありそうだと考え、消しゴムに匂いを付ける方法で試すことを考え出している。当面の疑問に対して、自分の過去の経験をもとにしながら、疑問を解決する方法を考え出せることも5歳児としての育ちの結果だと思った。